

侵略

者



『侵略者』

「極東防衛本部、応答願います！ こちらはK市市民自衛小隊。異星人からの急襲を受け壊滅的な状況です！ 救援願います！ 極東防衛本部！ 応えてください！」

やはりダメだ、応答が無い。K市の他の自衛小隊をはじめ、味方とは一切連絡がつかない。みな、やられてしまったのか……。

異星人が地上部隊を降下させて来てから24時間たらず。驚くほど洗練された組織的速攻により、きわめて粛々と、そして急速に我々の星は占領されつつあった。

ビルの地下23階に有るこのEブロック通信基地にも追っ手が迫っていた。異星人が各フロアに有る防護隔壁を破壊する度に振動が伝わって来るが、その振動もだいぶ大きくなって来た。もうすぐこのフロアにも奴らが押し入って来るだろう。

もはやこれまでか……。首から下げた銀のロケットを握りしめた。

「くそっ、侵略者め！ ニーナ、リック……。もうすぐお前達のところへ……」

凶悪な爆破音とともにドアが破壊され、レーザー自動小銃が乱射された。一瞬の後、金属の焼けた臭いと煙を残し、静寂があたりを包む。

「生き残りが居ないか探せ！」

「イエッサー！」

冷徹な声が響く。

「隊長！ 敵兵の死骸を一体確認しました！」

「よし！ 他にはもう居ないか？」

「どうやらコイツだけのようです」

「ん？ それはなんだ？」

「ペンダントでしょうか？」

兵が死骸の首に掛かった銀のロケットに手を触れると蓋が開いた。

「写真か……」

「三つ目でグロテスクなコイツらにも家族が居たのですね」

「……」

隊長と呼ばれるその男は、ロケットの蓋を閉めると死骸の両手をその上に重ねてやった。

「地上に戻るぞ。地球連合艦隊に制圧完了の報告だ」

「イエッサー！」